

物理，化学系科学におけるカナダ女性学者の実態

McGill 大学教授 Gabrielle Donnay

上に記した問題点に対する回答は、少なくともアカデミックな職業に関する限り残念ながら“あまり満足すべき状態にない”とならざるをえない。一方生命科学や生化学のような境界領域の分野では、多くの女性が受け入れられて成功している。例えば、私の所属する McGill 大学 (Montreal) では、生化学教室の主任は、女性であり、Toronto 大学でも同様である。しかしながら McGill 大の化学、物理、地質などの教室では、私が唯一の教授会メンバーである (私の専門は、結晶学であり、これらの分野の外とみなされているが)。私の知る限り、私は、McGill 大学の創立された 1830 年以來、これらの分野で、唯一人の女性の正教授である。しかも、McGill 大が例外ではない。今年末に発行予定のカナダ女性地質学者名簿から統計をとってみる。カナダの大学には、全部で 44 の地質学教室があり、そのすべてを調べて解ったことは、44 教室で女性の正教授は、たった二人だけだということである。北アメリカの大学を眺めてみると、どの教室にも多くの正教授がいる。典型的な出世コースなるものを考えてみると、所謂ポストドクで 2~3 年、助手を 3~5 年、助教授を 5~7 年、そして 40 才前後で引退までの正教授として

のキャリアが始まる。しかも正教授の法的定年がないのであるから、例えば地質学の分野等では、正教授の中で女性の占める割合は、1%以下となる。

それでは、我々女性は、この惨めな状態を如何に変えようとしているのだろうか？

我々は、多くの女子学生を地質学に進学させるよう努力している。今では 30~40 人のクラスに 2~3 人、ではなく少なくとも 1/3 ないし 1/2 は、女子学生で占められるようになってきている。このような変化は、ここ 10 年程の間に起った。上に述べた名簿の目的は、充分な訓練を受け豊富な経験を持ちアカデミックな地位に相応しい女性の存在を広く知らしめるところにある。最も大切なことは、アカデミックな職業における採用と昇進も、他のすべての職業と全く同様に、専門に対する資質のみを基準としておこなわれるべきだ、という趣旨を広く認めさせようと、われわれが努力している点である。物理や化学の分野で女性が男性より劣っているという科学的根拠はなにもない。

この男性社会を、両性に平等な機会を与えるような世界に変えていきましょう！

(訳 田賀井)